



園芸作物栽培に関する

これからの対策

Q & A

◎梅雨時期の病害虫予防対策

梅雨時期は温度、湿度が上がり日照時間が少なくなるため、カビ菌による病害の発生が多発します。またこれまでの好天でアブラムシの発生が例年よりも多くなっています。病気や害虫は発生が目立つことから根絶は困難です。発生する前の予防対策を徹底してください。



○降雨対策

梅雨の後半は降りだすと大雨となりやすく、圃場が水浸しとなってしまう。圃場排水に努めることは当然ですが雨にたたかれ、泥の跳ね上がりを受けるなど小さな傷が無数にできます。こうした傷から

◎雑草防除について

梅雨時期は雑草の伸びも旺盛になります。草丈が伸びるほど薬剤の量も多くなり手間もかかりますので早めに処理をしましょう。フウンドアツプやプリグロックス等の葉室処理剤は、朝露が残っている朝早くに散布すると除草剤の吸収が良いので効果がやすいです。

◎梅雨明け後の野菜管理

通常ですと7月下旬には梅雨が明けます。長雨で軟弱に育った作物には厳しい時期なので、晴天日には繁茂した葉茎を整理し、根の負担を軽くしましょう。ハウス栽培では換気に気を付け快晴の日中は遮光する等をして作物の保護をしてください。

梅雨明け以降は高温で乾燥で作物の蒸散が激しく、水不足になりがちなので水やりを充分に行ってください。水やりをしても根まで届いていない場合もあります。一度、水やり後にシャベルで掘って浸水加減をチェックしてください。

◎追肥について

トマトやナス、キュウリ等の収穫が長く続く野菜は、最も養分を必要とする時期なので追肥を行ってください。一度に大量の肥料を与えると根を傷めます。追肥の基本は、少量を小まめにやることです。毎週1回、そよご30g/30cm²、50g/株を施用してください。

カボチャやスイカ、メロン等は果実の肥大初期に2〜3kg/1aをツル先に1度施用してください。以降収穫まで追肥の必要はありません。



肥料のやりすぎで枯れた苗

病害菌が侵入してきますので、強い雨が合った場合には雨上がりに殺菌剤を散布することで、その後の被害を軽減できます。また株元に敷きワラを充分に行うことで地温の上昇を抑えることができることも、跳ね返りも防げます。地温性のスイカやカボチャ、ウリなどは蔓が水たまりに浸からないように手当てすることは大変有効な対策となります。降雨で野菜の葉などが濡れている状態のときに収穫や整枝など作物体を傷つけるような行為は行わないでください。

○予防対策としてよく使われている農薬

・殺虫剤

モスピラン水溶性、アフアーム乳剤、スタークル顆粒水溶性、ジエイエース水溶性、マラソン乳剤、スミチオン乳剤

・殺菌剤

トップジンM水溶性、ダニール1000、ベンレート水和剤、シマンダイセン水和剤

○ナメクジ、カタツムリの防除

梅雨時期に入ると、ナメクジやカタツムリの被害が増えます。農薬ではナメキール等を使用しますが使い方を間違えると効果がありません。散布は風のない日の夕方に1mあたり1gを目安にバラマキをしてください。この薬は水に濡れると効果を失いますので、雨が降る時や散布後の水やりは厳禁です。次々に卵からかえるナメクジがいるので薬剤を1週間から10日ごと3回ほど繰り返し散布すると効果的です。農薬を使用しない場合は、ビール、米ぬか、バナナの皮等で誘引し、夜に集まったところを捕殺してください。

◎ナスの剪定について

上から見て、元気の良い枝を3〜4本残し、株元などからでている弱い枝や接木苗の台木からでている芽は切除してください。残した3〜4本の枝からでる分き芽は花が1つ咲いたらその先の葉を1枚残し、先端を切除します。これを繰り返し行うと良いですよ。

◎秋野菜の準備

秋野菜のうち、キャベツ、ブロッコリーなどは品種によって7月上旬から始まりです。早播きに適切な品種の選定が重要です。7月中旬までは早生系の品種を選択します。播種直後から幼苗期はナメクジ、それ以降はアオムシなどに注意します。直射日光は避け、寒冷紗やヨシズなどや遮光して温度が上がらないよう、また大粒の雨でたたかれない様に管理してください。

◎よくある質問

野菜が生育しないという質問を多く受けます。こうした症状の場合、乾燥が続いた後の急な大雨（排水不良な圃場で出やすいので排水を整えておく）

②肥料をやりすぎている（特に尿素、硫酸、そよご等の多用）

③連作障害（次作は場所を変えるか接ぎ木苗を使用する）

④軟腐病の発生（排水不良な圃場で出やすいので排水を整えておく）

⑤害虫の幼虫に根や茎を食害されている（臭いがする堆肥を施用すると食害をうけやすい）

これらが原因ですので消去法で原因を特定してください。

